低学年次における進路指導

生徒の将来設計を支援しながら着実に進路を描かせる

一つの進路を選択するということは、いい換えればほかの進路を捨てることでもある。それだけに進路指導の持つ役割は大きなものがある。生徒が自らの適性を見つけ、自分を生かす進路選択をするためにはどんな指導が必要か、そのポイントを考えたい。

進路指導は、生徒に将来設計も含めて自分がどう生きていくかを考えさせ、目標に向けて自分自身を成長させるよう指導することである。その意味で進路指導は生き方指導であり、その道筋をつけさせるための指導であるといえる。それが基本にあったうえで、具体的な指導の場面としての進路指導や教科指導が出てくると理解したい。

したがって、進路意識の育成とそれに続く進路選択は付け焼き刃でできるものではなく、育成と選択の作業は当然時間がかかることになる。生徒に最もふさわしい生き方を考えさせるためには、中・長期的視野を持ってじっくり取り組むことが必要となる。それには1、2年生という早い時期からの指導が求められる。受験指導は極端にいえば3年生からでも間に合うが、進路指導については早すぎるということはない。しかも、進路意識や将来の目標は生徒によってまちまち。生徒1人ひとりに合わせた進路指導を行うためにも、早い時期からの指導が重要になってくる。

生徒の意志を尊重して結論を導き出す

進路指導は、それによって生徒自身が納得し、満足できる結論が得られることが一番望ましい。指導にあたってはそれを念頭に置いて「生徒の好きなこと、やりたいこと」を尊重し、大切にするという姿勢が求められる。生徒が出してきた志望、目標に対して「それはきみには向かない」「きみの学力ではその職業は無理だ」といったことを口にするのはやはり避けたい。いうまでもなく、その人生を生きるのは生徒自身であり、その人生を選択するのも生徒自身である。したがって、あくまで本人の意志の尊重を第一義としたい。自分で考え決めた目標なら、途中の成績がたとえすぐに伸びなくても、最後までがんばりとおすこともできる。

しかし、中には目的意識の低い生徒もいるだろう。特に1年生には「高校入学」という目標を達成して、次の目標を見つけられないまま、いわばエアポケットに陥ってしまっている生徒もいる。そういう生徒も含め、「本当にしたいことがわからない」「自分がなにに向いているのかわからない」という生徒に新たな目標設定をさせ、やる気を起こさせるのも、進路指導の重要な役割である。目的意識の希薄な生徒が増えているといわれる昨今、この面の役割は重要性を増しているともいえる。

進路指導では、科目選択、大学選択をきっかけにして、生徒を日々の学習に向かわせる場面が出てくるが、高校での学習は本来、自分を豊かにするためのものである。日々の学習を通して自分を見つめ、他者を理解し、いろいろなものに目を向けた結果、将来の進路という目標が浮かび上がってくるのだということを早い時期に生徒に理解させたい。

工夫して進路指導の時間を見つける

進路指導は、担任の側に工夫が求められる分野でもある。教科指導なら一つのやり方があり、そのために必要な時間もカリキュラムとして組み込まれている。しかし、進路指導は確立されたやり方があるわけでもなく、カリキュラムとして時間割に組み込まれていることもない。それだけに担任のやりくりで、LHRや放課後の面談などを進路指導の時間に当てる工夫が必要になってくる。

また、LHRや面談は生徒個々の特性を知るよい機会であり、個別指導の要素が多いという進路指導の性格からいっても、この時間を利用する意義は大きい。

とはいえ、LHRの時間は学校行事や学年集会・生徒会活動などに使われることも多く、進路指導のための活用は物理的な制約があることは否めない。実情ではその中での工夫にならざるをえない面がある。

その結果、進路指導では生徒が比較的自由に時間を使える夏休みが大きなウエートを占めてくる。前述の理由のほかにも、学期中はどうしても時間割に沿った教科指導が時間的にも役割としても比重が高くなりがちである。夏休みは、生徒が自分はなにをやりたいかという「自分探し」や職業・学問・大学研究などを集中的に行ういいチャンスであろう。

次のページから進路指導のポイントを考えていくが、各場面の時期はあくまでもモデルケースであり、学校・学年の指導方針により時期のズレがあることをお含みおきいただきたい。

参考データ
教師から見た生徒の自己理解度

		全体	普通科校1	普通科校2	総合校	専門校
自分にはどのような能力・適性があるか知っている生徒が多い	とてもそう思う	1.8	2.9	1.1	2.9	1.8
	どちらともいえない	35.8	44.7	30.7	29.4	33.5
	そうは思えない	62.4	52.4	68.2	67.6	64.7
就きたい職業がはっきりしている生徒が多い	とてもそう思う	2.9	2.9	2.2	5.9	5.3
	どちらともいえない	34.4	40.8	29.3	47.1	35.9
	そうは思えない	62.7	56.3	68.5	47.1	58.7
自分の将来についてはっきりした目標を持っている生徒が多い	とてもそう思う	3.1	4.5	2.4	2.9	2.7
	どちらともいえない	40.1	49.6	34.7	47.1	37.2
	そうは思えない	56.8	45.9	62.9	50.0	60.1
進路を選ぶうえで、重視する事柄（自分の能力・適性を生かせることなど）がはっきりしている生徒が多い	とてもそう思う	5.4	7.5	4.1	2.9	5.1
	どちらともいえない	48.0	54.1	44.8	47.1	45.8
	そうは思えない	46.6	38.4	51.1	50.0	49.1
自分の希望する職業について十分な知識を持っている生徒が多い	とてもそう思う	1.2	1.1	0.8	0.0	2.5
	どちらともいえない	35.4	38.4	31.6	35.3	40.9
	そうは思えない	63.5	60.5	67.5	64.7	56.7
最近の産業・職業について知識を持っている生徒が多い	とてもそう思う	1.5	1.8	1.4	0.0	1.2
	どちらともいえない	31.3	34.3	27.1	26.5	39.0
	そうは思えない	67.2	63.9	71.6	73.5	59.8
進路選択に関する情報の調べ方がよくわかっている生徒が多い	とてもそう思う	2.5	2.8	2.5	2.9	1.9
	どちらともいえない	42.3	52.3	38.3	41.2	34.4
	そうは思えない	55.2	45.0	59.3	55.9	63.7

（%）

※普通科校1は進学者が多い普通科校、普通科校2は多様な進路の選択者が多い普通科校。
※『全国高校の進路指導に関する実態調査報告書（1997年）』（ベネッセコーポレーション）より。

生徒の自己理解度について、教師は厳しく見ていることがわかる。どの項目も「そうは思えない」が、「とてもそう思う」を大きく上回っている。全体の平均値で見ると、「進路を選ぶうえで、重視する事柄がはっきりしている」がやや高く、「産業・職業について知識を持っている」が低い。この調査で見る限り、多くの生徒がはっきりした将来像を描くための知識を十分に持っておらず、将来の自分を描けていないといえそうだ。

各時期の指導のポイント

1年次夏休み〜3学期

職業観・人生観を醸成させる

進路研究は1年次の夏休みが実質的なスタートといってよい。時間的余裕のあるこの時期に、進路についてじっくり研究するよう、休み前に指示しておきたい。そして、その研究を受けて次の課題に取り組ませるようにする。しかし、「研究するように」というだけでは、生徒はなにをどう研究したらいいのか迷ってしまう。具体的な取り組みの方法をアドバイスすることが大切になる。

まずは、職業について目を開かせることから始めたい。生徒は案外限られた種類の職業しか知らないことが多いので、世の中には数限りないたくさんの職業があることに気づかせ、視野を広げさせることが必要だ。たくさんの職業を知って、その中から「自分はこの分野の仕事をしてみたい」とぼんやりとでも考えるようになることが最初のステップである。

将来の職業について、生徒は科目の好き嫌いから考えようとする傾向があるが、この時期はあまり短絡的に結びつけずに、純粋にやりたいことから考えさせた方がよい。例えば臨床検査技師や看護婦など、医療従事者になりたい生徒がいるとする。医療技術系学部や看護系学部は入試科目に数学を課す場合も多いが、数学が苦手だと「私には看護婦は無理」などとすぐに結論を出そうとする生徒が出てくる。しかし、この時期は可能性を広げさせることが重要であり、絞り込むことが目的ではないため、こういった生徒に対しても、なるべく希望や夢を実現させる方向で指導してやりたい。

どんな仕事をしたいかという職業観は、どんな生き方をしたいか、どんな人間になりたいかという人生観をベースに生まれてくるのが本来の姿である。生き方を考える、自分を豊かにする、価値観を豊かにするといったことにつながる勉強、研究もぜひさせたい。

研究の成果をレポートにする

「視野を広げ、職業観を育成する」「人生観を豊かにする」ための具体的な取り組みとしては次のようなものが考えられる。

- 『職業まるわかりBOOK』や、その職業に就くための道筋を紹介した本などを読む。
- 読書の勧め。読ませたい本は大きく分けて「生き方を考えさせる本」と「職業観育成の本」。自主性に任せておくと本を読まない生徒もいるので、例えば国語科の教師と連携して図書名を指定する方法もある。また、この時期に長い文章を読んでおくことは、その後の小論文指導にも役立つ。
- 職業観の育成や人生を考えるのに役立つ講演会を開く。学校にそういった行事が組まれていない場合、最近は講演会ビデオがいろいろと出ているので、それを担任がクラスで見せる方法もある。
- 家族や知り合いを頼って職場を訪ね、働くということについて考える。
- 裁判所などの公的機関や企業を見学する。
- ボランティア活動に参加する。
- 興味ある分野の新聞記事などをスクラップする。
- 卒業生から大学、仕事などについて話を聞く。
- 職業などをテーマに保護者に文章を書いてもらって文集にし、生徒が読む。
- 『進路学習ノート』の活用。進路選択の筋道に従って順にステップを踏む作りになっているので、その時期その時期になにをすべきか、生徒が理解しやすい。指示に沿って書き込むことで、自分の考えをまとめることもできる。また、教師がそれを読めば、生徒理解にもつながる。

右に挙げた取り組みは、実施しただけで終わらせずに、その経験を通して生徒の職業観、人生観を膨らませるように方向づけたい。それにはレポートを書かせて、生徒が自分の頭で考えるようにするのが効果的だ。

そのレポートをLHRなどで発表すると、ほかの生徒への刺激づけとしての効果もある。生徒は生徒から学ぶことも多い。ときには教師のアドバイスより、ほかの生徒の発言の方が影響を与えることもある。クラス40人の中には飛び抜けて高い意識を持った生徒が必ずいるものである。そういう生徒のレポートを読んで聞かせれば、「あいつは人生についてあんなに深く考えているのか。自分はどうだろう……」と自らを振り返るきっかけになるだろう。そういう生徒のレポートではなくても、ほかの生徒の人生観、職業観、価値観に触れることで視野を広げるきっかけになる。また、各自のレポートを面談で利用することもできる。

「職業観を育成する」「人生観を豊かにする」ための取り組みは、やってすぐ効果が出るという性質のものではないし、短期間でやれるものでもない。したがって、繰り返し考える機会を与えることが大切であろう。

やりたいことから文理選択を考える

生徒の職業観を育成し、人生観を豊かにするためのさまざまな取り組みの結果が、次の文理選択というステップに臨む際のベースとなっていく。文理選択が行われる時期は高校によって異なるが、夏休みから1年次が終わるまでの間にある程度の方向を見つけさせたい。

文理選択は「自分が社会でなにをやりたいか」「どんな職業に就きたいか」を考えさせ、そのためには文理どちらを選ぶべきか、という観点から取り組ませるようにする。生徒は科目の得意・不得意で文理選択をしようとする傾向がある。もちろん、それも重要な要素ではあるのだが、それだけではなく、将来像と結びつけて選択させるようにしたい。

しかし、職業という観点からのアプローチだけが文理選択への唯一の道ではない。「将来、この学問を勉強したい」というのも当然もう一つの道として存在する。「大学に進んで○○学を勉強してみたい」という希望を持っている生徒に対しては、職業という観点をとりあえず脇に置いて学問から文理選択させるのもよい。

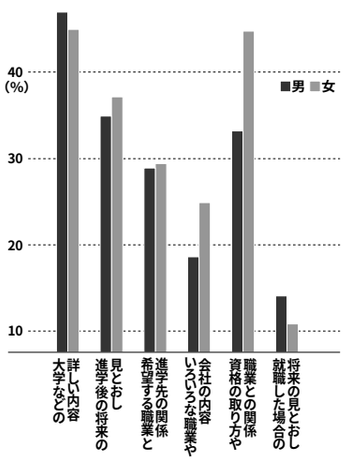
実際には1人の生徒の中に「なりたい職業」と「学びたい学問」の二つの道があって、生徒によって前者の道が太かったり、その逆だったり、また、二つの道が交錯したり、いっしょになったりしながら文理選択の結論にたどり着くことが少なくない。「文理選択は職業研究から行う」と一つの枠にはめずに、個々の生徒に合わせて柔軟に指導したい。

いずれの道にせよ、やりたいことから結論を出せば、生徒は自分の選択に納得することができる。たとえ、そのあとに困難があっても「自分で決めたことだから」とがんばることもできるだろう。また、この段階では即大学進学に結びつけて結論を出させるのではなく、考えを熟成させる方向に持っていきたい。

なお、この時期に限ったことではないが、進路指導では保護者の協力を得ることが大切な要素である。生徒の進路選択への保護者の影響力は少なくない。「子どもをある方向へ強制するのではなく、かといって子どもに任せっきりにするのでもなく、いっしょに進路を考えていく」ようにお願いしておきたい。

参考データ

進路選択について高校在学中に知っておけばよかった情報



※データは普通科卒業者で大学進学者のもの。
※文部省『平成6年度学校教育と卒業後の進路に関する調査』より。

進路選択について高校在学中に知っておけばよかった情報では、「大学などの詳しい内容」がトップ。大学研究は進路指導の大切な要素で、多くの高校で指導しているにもかかわらず、大学入学後、「知っておけばよかった」と振り返る学生が多い。大学研究はそれだけ重要な項目であり、大学に入ってから「イメージしていた学問内容と違う」などと後悔させないためにも、きちんと指導したい。

2年次前半〜中盤

大学研究を通して学問内容も理解する

1年次の取り組みをベースに少しずつ大学を意識させていきたい。なりたい職業から将来を考えた生徒には、その道に進むためにはどんな学部が有利か、資格が必要であればどんな学部で取れるか、その学部はどの大学に設置されているかといったことを調べさせる。なにを学びたいかから考えた生徒には、その学問が学べる学部はどこか、その学部はどの大学に設置されているかを調べさせる。この時点では難易度などは気にせず、どういう道に進みたいか、という観点から取り組ませることが大切だ。

生徒はそれまで進路指導室や進路相談室に行ったことがあるだろうか。そこには学問・大学研究のためのさまざまな資料があることを伝え、まずそこへ行って自分の手で調べてみるように指示したい。

大学の中身を調べるうちにその学問に対する理解が深まり、学問が細分化されていることにも気がつく。例えば心理学を勉強したいと漠然と考えていたとして、詳しく調べると臨床心理学、産業心理学、社会心理学などさまざまな分野があり、研究内容もそれぞれ違いがあることに気がつく。それによって自分が心理学のなにを学びたいのか、ぼんやりしていた像がはっきりしてくることもあるだろう。また、同じ学部・学科名でも大学によって研究内容が異なる場合があるということもわかってくる。

特に学際系の学部・学科については詳しく調べさせたい。学部・学科名だけでは研究内容がはっきりしなかったり、生徒が想像していたのと研究内容がかなり異なるといったこともありうる。学際系学部・学科は増加の傾向にあり、注意を促したい。

ある程度調べたら、それを1度書き出してみる作業をさせるとよい。書き出す項目として、各大学の学部・学科について「学風・大学の沿革」「講座や授業内容の全体像」「興味のある講座」「研究施設」といったものがある。この作業を通してばらばらだった知識が整理され、またその大学や学部・学科に対する興味が表面的なものかそうでないか、の自己判断もできる。

この段階で特に注意したいのは、無理に志望を一つの学部・学科に絞る必要はないという点。建築学に興味があるが、農学部も捨て難いというような場合、どちらも希望として持ち続けさせるようにしたい。特にあまり特殊な学部・学科に絞ってしまうと、受験できる大学が限られるといった事態が出てくる。

以上の研究は2年次の夏休みまでに取り組んでおくのが理想的だ。1年次の進路研究同様、大学研究についても夏休みを有効に活用させたい。

資料調べと体験の2本立てで

大学研究の材料、具体的取り組みとしては次のようなものが考えられる。

・大学案内。最近の大学案内は学ぶ内容が詳しく書いてあるものが多く、その学部・学科固有の研究内容が把握できる。

・シラバス。大学案内以上に、どんな先生がどんな研究をしているかが詳細にわかる。ただし、公式にシラバスを高校に配布している大学は少ないので、高校から「生徒の大学・学部選択の一助として1部分けていただきたい」とお願いする方がいいだろう。担任がばらばらに大学に請求するよりも、進路部長なり校長の名でお願いしてはどうだろうか。自分の大学の中身をよく知ってもらいたいというところは送ってくれるはずだ。

・先輩に大学の話を聞く。

・オープンキャンパス。人から聞く情報に比べて、自分の目・耳・肌で感じることの方が、訴えかけの強さが違う。オープンキャンパスの日でなくても、大学に行って学生に大学の様子などを聞いたり、雰囲気を感じたりするのもよい。大学の飾らない姿が体験できる。

・『学問まるわかりBOOK』で、興味のある学部・学科が設置されている大学はどこか調べてみる。

・『進路学習ノート』に、学風、授業内容など、自分が調べてわかったことを書かせてみる。

2年次後半

受験を意識した科目選択をさせる

3年次に向けた科目選択は、大学受験を視野に入れたものとなる。したがって順序としては、①志望校群を決める→②志望校群の入試科目を調べる→③科目選択、の順になる。志望校については1校だけではなく、何校か（あこがれ校、実力相応校、安全校）選ばせるようにしたい。

①②を終えた段階で調べたものを書き出させると、生徒は頭の中の整理ができる。志望校ごとにセンター試験科目名、2次試験科目名を書き出すだけでも、各大学に共通して必要な科目、そうでない科目がひと目でわかり、科目選択の材料となる。

科目選択では、志望する大学・学部・学科の入試科目を念頭に、どの科目を履修するかを決めることになる。その際、苦手なこの教科は科目を多く履修して克服しようとか、少しでも得意な教科を多く履修しようといった学習計画を立てることが生徒には求められる。科目選択については決まった履修モデルがあるわけではないので、生徒自身が入試までの学習の流れをイメージしながら、全体の設計図を引く作業が欠かせない。

中には苦手科目を敬遠する生徒も出てくるが、苦手であっても可能な限り履修した方が、受験できる大学の幅を狭めないことを伝えておきたい。進路指導の原則は絞り込むことではなく、可能性を広げることにある。

ただし、授業は予習・復習して臨んでこそ実力がつく。あまりにたくさん苦手科目を履修して、予習・復習が追いつくかという点も留意させたい。学習プランは基本的に学校の授業中心に組み立て、授業で実力を伸ばすようにさせることも大切だ。

また、科目選択にあたって、志望校群の中に1教科受験などの特殊な受験方式があるとやすきに流れて、選択する教科の数を減らそうとする生徒も出てくる。しかしその結果、併願できる大学・学部の数が極端に減ることもあるので、あくまで最も受験科目の多い方式を念頭に科目選択させるようにしたい。

科目選択では面談の役割が大きい

生徒が履修科目を決めたあとは、面談などを実施して、選択した科目がその生徒にとって妥当なものになっているかどうかを確認し、必要であれば適宜アドバイスをしていく。

科目選択は生徒1人ひとりその内容が異なるので、面談をはじめとする個別指導の役割が大きくなる。その際、基本的には生徒の自主性を尊重して、無理があったり、もっと適切な選択方法があればアドバイスするというスタンスが望まれる。

なお、科目選択に際しては、進路希望の確認が前提となる。また、教師の指導によって生徒が履修科目を変えるようなときは、保護者の理解も必要なので、3者面談を行うことが必要になってくることもある。

参考プラン

科目選択のチェックリスト

- □ 志望校の入試科目を調べた。
- □ 志望校の入試科目の中で自分がどの科目を選択するか決めた。
- □ 入試で必要になる科目を3年次の授業で受けることができる。受けることができない場合、先生に相談した。
- □ 入試で数学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、A、B、Cのうちどれが必要か確認した。
- □ 入試で英語のリスニングがあるか確認した。
- □ センター試験で地歴Bを選択する。または、地歴Aを選択することを教師に相談した。
- □ 入試で地歴2科目が必要であるか確認した（文系）。
- □ センター試験で公民が必須であるか確認した。
- □ センター試験で理科ⅠBを選択する。または、理科ⅠAを選択することを教師に相談した。
- □ 入試で理科2科目が必要であるか確認した（理系）。
- □ 入試で理科ⅠBまでよいか、ⅠBとⅡが必要か確認した。
- □ 入試で小論文・面接・実技などがあるか確認した。

各項目をチェックさせ、できていないところがあったら早く行動に移させたい。選択にあたって、この時点で最低限必要な科目に絞るのはやめさせたい。志望校が変わったとき対応が難しくなる。この段階では文系は数学Ⅰ、Ⅱ、A、B、理系は数学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、A、B、Cすべてやるつもりでいた方がよい。

※今年度から『学問まるわかりBOOK』に掲載されていた内容は、新たに創刊される『学べる大学探せる事典』に掲載されます。